

りんご病害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	早	多	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年秋期の発生園地率は平年より高かった。(++) (3) 5月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に感染を助長する条件ではない。(±)
モニリア病 (実ぐされ)	早	並 (平年少発生)	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年の発生園地率は平年並に少なかった。(±)
赤星病	—	並	(1) 近年の発生は、一部園地で見られるが全般的に少ない。(—)
うどんこ病	—	並 (平年少発生)	(1) 近年の発生は、一部園地で見られるが全般的に少ない。(—)
斑点落葉病	早	やや多	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年の「ふじ」の発生園地率は平年より高かった(+)。 (3) 5月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染に好適な条件。(+)
腐らん病	—	並	(1) 前年の巡回調査において、発生園地率は平年並だった。(±) (2) 4月後半の巡回調査では、発生園地率は平年並だった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 5～6月は、多くの病害の重点防除時期である。防除薬剤の散布間隔が空きすぎないように注意するとともに、降雨前の予防散布を心がける。
- (2) 耐性菌の発達を防ぐため、落花10日以降はEBI剤を使用しない。また、開花7～10日前及び開花直前におけるカナメフロアブルは1回限りとし、SDHI剤の年間使用回数は4回（殺菌剤総使用回数の3分の1）以内とする。

【黒星病】

- (1) 重点防除時期である開花7～10日前及び開花直前に、EBI剤もしくはカナメフロアブルを散布するが、両剤は降雨直後に散布すると効果的である。気象経過に注意し、適期防除を心掛ける。
- (2) 散布ムラが無いように十分量を丁寧に散布する。
- (3) 発病葉や発病果は二次伝染源となるので、速やかに摘み取って園地外へ持ち出し、地中に埋没させる等して処分する。
- (4) 苗木を定植する際は、頂芽のりん片で越冬する可能性があるため、必ず頂部を切り返す。
- (5) 苗木及び未結果樹も成木と同様に防除を徹底する。

【モニリア病】

- (1) 葉ぐされ、実ぐされは早めに摘み取り処分する。
- (2) 開花直前散布までに葉ぐされを見つけた場合は、直ちにアンビルフロアブルまたはオンリーワンフロアブルを散布し、葉ぐされの病斑拡大（花ぐされ）を防ぐ。
- (3) 実ぐされの発生が心配される園地では、満開時にトップジンM水和剤を特別散布する。なお、ミツバチを導入している園地では散布前に巣箱を撤去する。

【赤星病】

(1) 開花直前散布や落花期散布に黒星病対象のE B I 剤により同時防除する。

【うどんこ病】

(1) 開花直前散布や落花期散布に黒星病対象のE B I 剤やカナメフロアブルにより同時防除する。

(2) うどんこ病の前年多発園にて、落花期散布にマンゼブ水和剤もしくはデランフロアブルを用いる場合は、コナケシ顆粒水和剤もしくはE B I 剤を組み合わせて防除する。

【斑点落葉病・褐斑病・黒点病】

(1) 例年問題となる病害に合わせて、落花期～落花 30 日頃（幼果期）までの定期散布剤を選択する。

(2) 褐斑病の前年発生園では、落花期～落花 20 日後にかけてデランフロアブルやマンゼブ水和剤、ラビライト水和剤を散布する。

【腐らん病】

(1) 罹病枝は開花期頃が最も発見しやすいので、園地をよく見回り、病患部の早期発見、早期処置に努める。

(2) 腐らん病は、発生樹に隣接する樹に次年度も発生する傾向があるので、特に発病歴のある樹及びその隣接樹は注意して観察する。

(3) 枝腐らんや胴腐らんは見つけ次第、剪除や削り取りを行い、切り口や削り取り部に薬剤を塗布する。6 月以降、病患部からの孢子飛散が多くなるので、遅くとも5月中には処置を完了する。また、剪除した枝や削り取った病患部は園地内に残さないよう処分を徹底する。

りんご虫害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ハマキムシ類	早	並	(1) 基準圃場（北上市成田）でのミダレカクモンハマキのふ化時期は、平年より早く、5月の気温は平年並か高い予報であり、発生に好適な条件。 (+) (2) 4月後半の巡回調査では発生が確認されなかった。(－)
リンゴハダニ	並	多	(1) 基準圃場（北上市成田）でのふ化時期は、ほぼ平年並。 (2) 3月下旬から4月上旬の巡回調査での越冬卵の寄生園地率は、平年より多かった。(+) (3) 5月の気温は平年並か高い予報であり、発生に好適な条件。(+)
ナミハダニ	－	やや多	(1) 4月中下旬の巡回調査での発生園地率は、花叢葉、下草ともに平年並であった。(±) (2) 5月の気温は平年並か高い予報であり、発生に好適な条件。(+)
果樹カメムシ類	－	やや多	(1) 簡易トラップによるクサギカメムシの越冬量は多かった。(+) (2) 本年のスギ・ヒノキの花粉飛散量は、例年より少ない見込み。(+) (3) 5月の気温は平年並か高い予報であり、発生に好適な条件。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－-)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハマキムシ類】

- (1) 落花期にハマキムシ類、アブラムシ類等を対象に有機リン剤を散布する。
- (2) 訪花昆虫導入園では、それらに影響のないIGR剤やBT剤、ジアミド剤を用いる。

【ハダニ類】

- (1) リンゴハダニの発生が多い園地では、落花期にサンマイト水和剤、ピラニカ水和剤、バロックフロアブルで防除を行う。なお、リンゴハダニ、ナミハダニの両方がみられた場合は、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布（落花期、落花10日後）による防除が有効である。
- (2) ナミハダニの発生が多い園地では、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布で防除を行う。

【果樹カメムシ類】

- (1) 越冬成虫の飛来は、落花期前後から見られることが多い。今年は越冬量が多いので、例年発生が見られる園地では、この時期以降特に注意して観察を行う。
- (2) 飛来観察は、果実が餌となる周辺部の樹木（サクラ、クワ、キリ等）や防風ネット等も併せて随時行う。
- (3) 大量の飛来が確認された場合は、ただちに効果の高い薬剤を特別散布する。
- (4) 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。

【モモチョッキリゾウムシ】

- (1) 前年被害が目立った園地での落花期の防除薬剤は、効果の高い合成ピレスロイド剤を選択する。

3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。
- (2) サンマイト水和剤は、マメコバチに対して影響があるので注意する。